

社会人経験を持つ看護学生の理解と支援 —看護への志望動機と就学上感じる困難について文献からの検討—

高野 真由美¹⁾

要 旨

社会人学生が看護を選択した志望動機と就学上感じている困難から、社会人学生の理解と支援のあり方の示唆をえるために文献検討を行った。2006年～2016年の医学中央雑誌のWebを中心として文献検索し、質的研究10件を分析対象とした。看護を選択した志望動機は、【経済的安定のため】【資格取得のため】【看護への関心と魅力】【看護の社会的価値】【看護との関わり経験】【自立への希求】【知人のすすめ】であり、現状への不満足感から看護へキャリア変更をしていることが明らかとなった。就学上感じている困難は、【教員との指導関係】【現役学生との関わり】【学習へのプレッシャー】【家庭における非役割遂行】【経済的自立との両立困難】であった。教員は社会人学生に対する指導として、専門性の高い看護分野は、社会人経験からの意味づけや自己判断で援助はできないこと。そして、看護の専門性における学習内容と目標到達度を明確に示す必要性があると考えられる。

キーワード：社会人経験 看護学生 志望動機 困難 キャリア

I はじめに

近年、我が国の伸び悩む景気対策と将来への経済的基盤の不安を背景に、就職、資格取得による安定した生活を求め、看護以外の大学を卒業し学士号をもつ看護学生や、さらに看護以外の専修学校や高校を卒業した後に就労した経験を持つ看護学生（以下、社会人学生と略す）の看護基礎教育機関への入学希望者が増加傾向にある。

一般社団法人日本看護学校協議会が2012年度に調査した結果、3年課程の看護師養成所では、総在籍数に占める社会人学生の割合が23.7%である¹⁾。また、厚生労働省の2016年統計²⁾では看護以外の大学、短大、専修学校卒業者の割合は10.0%と報告されている。

我が国では、社会保障と税の一体改革による医療・介護サービス提供の改革として、2025年までに現状よりも50万人増の、200万人の看護職員の確保が必要との試算が示されており、その対策の一つとして、大卒社会人経験者等を対象とした養成制度が

提案されている。そこで、2015年3月に厚生労働省から、看護師養成所における社会人経験者の受け入れ準備・支援のための指針がだされた³⁾。このことから今後、増々社会人学生による看護基礎教育機関に占める割合の増加が予測されるため、多様な背景を有する社会人学生への教育指導の在り方が重要になると考えられる。

このように教育指導の在り方が重要と考えられているものの、看護教員は社会人学生に対しどのように指導したらよいか苦悩し、困り、敬遠し、社会人学生の学ぶ姿勢を問題化するようになった。そして、その対策を見出そうと、社会人学生をテーマとした研究が看護教育に関連する学会発表にて徐々に見受けられるようになった^{4) 5) 6)}。

先行研究によると、看護教員から捉えた社会人学生の特徴は、知的欲求が高く学習への取り組みも意欲的であり、グループワーク時にはリーダーシップをとるなど積極的である。その一方で、年齢も上で、経験に裏打ちされた自信や自己に対する肯定的評価が高いことから、その肯定的自己像が傷つけられる行為には敏感であると報告されている⁷⁾。

1) 川崎市立看護短期大学

さらに考えが堅く、出来ていない部分に固執するなど、臨地実習指導においてその傾向が問題となることも報告されている⁸⁾。

しかし筆者は、社会人学生の指導の困難さを社会人自身の問題のみとしてとらえる看護教育のあり方に疑問を感じる。何故なら社会人学生が、これまで受けてきた教育や社会人経験とは違う看護界に入ってきたことで、適応できないことから生じていると思われる問題もあるが、看護教育のあり方にも問題があると考えられるからである。つまり、社会人学生だけでなく看護教育に携わる教員との双方に問題が存在すると捉える必要がある。そのためには、社会人学生がどのような思いで看護界に入り、看護を学ぶ中で感じていることを社会人学生の視点でとらえる必要がある。すなわち、これまでのキャリアを変更するに至ったプロセスから、確たる動機をもって看護の道を選択した社会人学生が、入学後の就学上において何に困難を感じているのか。また何故、看護教員が指導困難で問題と捉えるような態度をとるのかなど、社会人当事者の思いを明らかにしたデータを分析することが大切であり、そのことから社会人学生の理解へ繋がると考えられる。

そこで今回、社会人経験をもつ看護学生の看護の志望動機と就学上感じている困難に関する先行研究のデータを検討することで、社会人学生を理解する手がかりとしたい。その理解から、今後看護基礎教育機関において、増々増えると思われる社会人学生への支援の一助となる示唆を得られると考えられ

る。

II 研究目的

社会人経験をもつ看護学生に関する文献レビューを行い、看護への志望動機および就学上感じる困難について分析することで、社会人経験をもつ看護学生の理解と支援のあり方の示唆を得る。

III 研究方法

1 対象

医学中央雑誌Web版をデータベースとして使用した。検索条件は2006年～2016年の国内文献で、会議録を除く原著とした。「社会人経験」and「学生」をキーワードとして検索を行ったところ65件みつかった(平成26年3月実施)。これら65件のタイトルや抄録から判断して、内容が本研究の目的に関連すると思われるもの32件を選択した。さらに看護と介護以外の社会人経験を有するものを対象とし、質的にデータ分析した研究の8件を分析対象とした。さらに、「学士」and「入学」and「看護学生」を対象としたキーワードで検索した結果みつかった5件の中から、タイトルや抄録から判断し学士修得後社会人経験のある質的研究の2件を対象とした。合わせて10件の質的研究を対象とした理由は、量的研究のようにあらかじめ研究者による仮説に基づき設定した調査項目ではなく、研究協力者の内面の主観性を意味する内容を重視したからである。(表1参照)。

表1 分析対象とした文献

NO.1	魚住郁子他.社会人経験のある看護学生が学校生活の中で学びつづけていくプロセスー学びの深化に関わる体験の語り—to注目してー.日本看護学教育学会誌.Vol25, No1, 2015, p.41-49.
NO.2	奥裕美.学士号をもつ看護学生が看護教育機関を選択した理由.聖路加看護学会誌.16巻,3号,2013,p.28-37.
NO.3	一般社団法人 日本看護学校協議会.平成25年度厚生労働省看護職員確保対策特別事業 大学卒業(看護以外の分野)の看護師養成機関への入学及び学習環境等の関する意見調査ー大卒(看護以外の分野)・社会人経験のある看護師対象調査ー.2014,p.45-54.
NO.4	井上晴美.社会人が入学試験受験時に抱いている看護学校への思い.東京厚生年金看護専門学校紀要.14巻,14号,2012,p.8-20.
NO.5	武森八智代他.社会人経験を持つ学生の看護専門学校で学習することの意味.中国四国地区国立病院附属看護学校紀要.Vol3,2007,p.91-103.
NO.6	三木隆子他.社会人経験をもつ3年課程看護専修学校生の学習支援の在り方 社会人学生と教員に半構成的面接を行って.インターナショナルNursing Care Research.13巻,3号,2014,p.155-165.
NO.7	迫田智子他.社会人経験のある看護学生の就学上の困難と学業継続への対処.日本看護学会論文集 看護総合.44号,2014,p.321-324.
NO.8	夏谷志保美.社会人経験を有する学生が臨地実習指導者から受けた指導の印象.神奈川県立保健福祉大学実践教育センター看護教育研究集録.36号,2011,p.80-85.
NO.9	井上晴美.主体的に学習できる社会人学生が教員に望む指導.JHO東京メディカルセンター付属看護専門学校紀要.1巻,1号,2015,p.1-8.
NO.10	根岸貴子.社会人経験を持つ学生が看護専門学校で学ぶことの認識.日本看護学会論文集 看護教育.42号,2012,p.26-29.

2 分析方法

分析対象となった文献を繰り返し抄読し、看護への志望動機について記述されている内容の箇所を抽出し、類似性に基づいて分類しカテゴリ化した。また、就学上感じている困難については、分析対象の文献の中で「困難」として調査されている内容と結果が少なかったため、困難と捉えられる記述内容の箇所を抽出し、カテゴリ化し就学上感じる困難とした。分析に関しては、他の研究者のアドバイスをうけた。

3 用語の定義

社会人学生：看護以外の大学または専修学校や高校を卒業し、社会人としての職業経験を持つ看護学生

IV結果

社会人学生が、看護を選択した動機及び就学上感じている困難について分析した結果を表2と表3に示した。

表2 社会人学生が看護を選択した動機

カテゴリ	サブカテゴリ
経済的安定のため	安定した収入を得られる仕事
	収入を増やしたい
	これまでの職業との比較
	職業の将来性に不安を感じる
資格取得のため	資格があり長く働き続けられる仕事
	国家資格の取得
看護への関心と魅力	就職のために医療・介護系の資格を取得
	昔から看護への関心がある
	看護職に魅力を感じる
	小さいころからの夢
看護の社会的価値	やりがいのある仕事
	看護職の果たす役割
	専門職につきたい
	看護は実生活に役立つ
看護への関わり経験	看護師を尊敬している
	看護(師)に接した経験
	本人・家族の病者体験
	看護を受けた経験
自立への希求	身近な人の闘病体験(死)
知人のすすめ	

表3 社会人学生が就学上感じている困難

カテゴリー	サブカテゴリー
教員との指導関係	初学者として現役学生と同じように指導して欲しい
	社会人とか現役生とか分けてみないで欲しい
	現役生とは違うような扱いに感じる
	教員との接し方がストレス
	教員間で統一した指導をして欲しい
	実習場所で教員の指導を十分受けたい
	経験を認めて欲しい
	納得できる実習評価
現役学生との関わり	社会人に頼ろうとする
	関係性を保つのが大変
	モチベーションの違いに苦労
	現役学生と交流したい
学習へのプレッシャー	現役の学生より知識の吸収力が違う
	勉強は家に帰っても引き続きしなければならない
	スケジュールに余裕を持って取り組みたい
	私生活での役割もあり勉強中心に時間をとれない
	講義時間中に効率よく学習したい
家庭における非役割遂行	家族へ負担をかけた
	子どもの進学で悩む
	家事が十分にできない
経済的自立との両立困難	経済的な自立と実習の両立にまつわる苦悩をわかって欲しい
	経済的な自立のためのアルバイトと実習を両立させたい

1 社会人学生が看護を選択した動機

社会人学生が看護を選択した動機として質的研究でまとめられた文献は、5件であった（表1 分析対象とした文献のNO.1、NO.2、NO.3、NO.4、NO.5）。これらの文献から、社会人学生が看護を選択した動機は、7つのカテゴリーに分けられた。

（以下、カテゴリーは【】、コードは[]で示す）

一つ目の動機としては【経済的安定のため】で[安定した収入を得られる仕事]、[収入を増やしたい]、[これまでの職業との比較]、[職業の将来性に不安を感じる]、[資格があり長く働き続けられる仕事]であった。

二つ目は【資格取得のため】で[国家資格の取

得]、[就職のために医療・介護系の資格を取得]であった。

三つ目は【看護への関心と魅力】で[昔から看護への関心がある]、[看護職に魅力を感じる]、[小さいころからの夢]、[やりがいのある仕事]であった。

四つ目は【看護の社会的価値】[看護職の果たす役割]、[専門職につきたい]、[看護は実生活に役立つ]、[看護師を尊敬している]であった。

五つ目は【看護への関わり経験】で[看護（師）に接した経験]、[本人、家族の病者体験]、[看護を受けた経験]、[身近な人の闘病体験（死）]であった。

その他に、【自立への希求】と【知人のすすめ】があった。

2 社会人学生が就学上感じている困難

社会人学生が就学上感じている困難なこととして質的研究でまとめられたものは、7件であった(表1 分析対象とした文献のNO.2、NO.3、NO.6、NO.7、NO.8、NO.9、NO.10)。これらの文献件から、社会人学生が就学上感じている困難は、5つのカテゴリにまとめられた。

就学上感じている困難なことの一つ目は【教員との指導関係】が最も多く[初学者として現役学生と同じように指導して欲しい]、[社会人とか現役生とか分けてみないで欲しい]、[現役生とは違うような扱いに感じる]、[経験を認めて欲しい]、[教員間で統一した指導をして欲しい]、[納得できる実習評価]、[実習場所で教員の指導を十分に受けたい]、[教員との接し方がストレス]であった。

二つ目は【現役学生との関わり】で[社会人に頼ろうとする]、[関係性を保つのが大変]、[モチベーションの違いに苦労]、[現役学生と交流したい]、[現役学生に言葉遣いの指導をしてほしい]であった。

三つ目は【学習へのプレッシャー】で[現役の学生より知識の吸収力が違う]、[勉強は家に帰っても引き続きしなければならぬ]、[スケジュールに余裕を持って取り組みたい]、[私生活での役割もあり勉強中心に時間をとれない]、[講義時間中に効率よく学習したい]であった。

四つ目は【家庭における非役割遂行】で[家族へ負担をかけた]、[子どもの進学で悩む]、[家事が十分にできない]であった。

五つ目は【経済的自立との両立困難】で[経済的な自立と実習の両立にまつわる苦悩をわかって欲しい]、[経済的な自立のためのアルバイトと実習を両立させたい]であった。

V 考察

1 志望動機からみる社会人学生の理解と支援の在り方

筆者は、これまでのキャリアを変更し看護を志望した社会人学生が、将来的に看護専門職としてのキャリアを形成できるように看護基礎教

育に関わる必要があると考える。そのためには、社会人学生がこれまでの経験の中で得た職業に対する考えを知ること、今後の社会人学生の職業アイデンティティ構築に関わる必要があると考える。そこで、志望動機を手掛かりに、入学前に選択し従事していた職業を社会人学生がどのように位置づけ、意味づけてキャリア変更に至ったかという視点で考察をする。

昨今の我が国の景気が低迷する中、社会人学生は、職業の将来性への不安や収入を増やしたい思いから経済的安定を求めて、看護を志望した理由をあげている。奥は⁹⁾ 学士号をもつ学生について「大学時代に就職難を経験した学生は、景気の低迷による就職難や就業継続への不安と関連しており、このような社会経済の状況が続けば、今後もこうした学生が看護職を希望することが予測される」と述べている。すなわち、大学時代または専修学校や高校時代の就職時に経験した就職難の不安が、現在の経済と雇用状況の上昇が実感できないことへの不安と関連し、経済的基盤を確保するために、将来にわたり就労継続可能な看護師資格取得を目的とすることが志望動機となっていると考えられる。

一方、志望動機には経済的な安定や資格取得だけではなく、自身や身近な人を通して、看護へ関わった経験からの看護への関心と魅力を感じていることもあげられた。また、看護は実生活に役立つという価値観や、看護職の果たす役割などから看護の社会的価値を志望動機としてあげている人もいた。しかし、それならば何故、社会人学生は卒業後にストレートに看護の道を選択しなかったのだろうかという疑問に感じられる。吉川ら¹⁰⁾ は、「初職の就職にたいし就職難のなか、何をしたいかということほとんど考えないまま、または就きたい仕事を考えたが決められないまま、やりたいことを見出せずに就職している」ことを指摘している。さらに、「社会人経験を経た再入学者のキャリア変更のプロセスは、就職後に会社や仕事に対する不満や、限界を感じ今の職業を続けていて本当に良いのだろうかという疑問を抱く現状に対する不満足感が、キャリア変更の出発点となっている」と、述べている。すなわち、自分らしさとは何か、このままでいいのか、という現状に

対する不満足感から職業の継続に揺らぎを体験したときに、新たな関心や以前から興味を持っていた、看護師をなりたい職業として発見したことが志望動機になったと考えられる。また、志望動機のカテゴリの中の知人のすすめについて風穴は¹¹⁾、他人のすすめをきっかけとし、そのきっかけは看護師志望動機に大きな影響を与えているとは言えないこと。一方、看護師を目指した社会的価値や自己成長のためといった理由の方が動機に影響を与えていることを述べている。さらに、吉川ら¹²⁾は、「キャリアを変更する女性は、自己成長や人の役に立ちたいという思いをもっており、仕事を自己実現の手段と捉え仕事に価値を置く」と述べている。すなわち、知人のすすめの志望動機はきっかけであり、むしろ自分の生き方にそのような自己実現のための手段として、自立への希求があることが看護を選択した大きな動機といえる。

以上より、キャリア変更に至った経緯からみた社会人学生の特徴として、次の二つがあげられる。一つは、初めはやりたいことを見出せずに、就職してから改めて自分の適性や能力を見直し、本当にやりたいことを探すモラトリアム的な特徴。もう一つは、やりがいや人の役に立ちたいという自己実現の手段として看護を選択した高い自立志向の欲求をもってることがあげられる。このモラトリアム的及び高い自立志向を特徴とする人たちが、キャリアを模索する中で、その職場での課題の解決策を見いだせず、現状に対する不満足感をきっかけとしキャリア変更をしていることが、志望動機の明確さに関連していると考えられる。

明確な志望動機について石井ら¹³⁾は、入学後の学習意欲を規程する要因の一つとして入学動機を挙げている。さらに原は¹⁴⁾社会人学生と現役学生を比較調査した結果、現役学生は親や教師に進められたとする割合が高く、社会人学生の入学動機は、将来の職業選択に結びついており、その動機が入学後の能動的な学習活動と関連することが明らかになっていると報告している。このことからキャリアを模索し、やりたい職業をようやく発見した社会人学生がもつ明確な看護への志望動機が、学習意欲と能動的な学習活動に繋がっていると考えられる。今

後その学習意欲と能動的な学習活動が低下しないよう、看護の学習にやりがいを感じながら、現状での課題を解決し、職業的アイデンティティが構築できるように看護基礎教育で関わる必要があると示唆される。

2 就学上感じている困難からみる社会人学生の理解と支援の在り方

本研究では、教員が社会人学生への講義や実習などにおいて、指導をする場面での効果的な支援の在り方を得るため、カテゴリの中の【教員との指導関係】【現役学生との関わり】【学習へのプレッシャー】の3つから考察をする。

社会人学生が困難として感じていることで最も多かったのは、【教員との指導関係】である。なかでも、現役学生と分けてみないで欲しいことや、同じように指導して欲しい等、現役学生と比較し、社会人学生への指導上の差別を感じている。

小濱¹⁵⁾は、社会人学生は目的意識が高く、経験を学習に生かすことができる。しかし、一般学生に行う教育方法では合わない、報告している。教員は、あえて現役学生と区別し、社会人学生の経験にあわせた指導を行っていると思われる。しかし、この教員の指導に対して社会人が困難を感じていることから、教員が認識している社会人学生像と現実の社会人学生との間にズレがあると考えられる。

教員が期待する社会人学生像は、ほとんどの看護基礎教育機関において取り入れている社会人入試制度の要件からみてとれる。それには社会人としての学習資源を活用していくことを要件としており、具体的には社会人経験を活かしたコミュニケーションスキル、大人としての振る舞いや接遇、チームをけん引する力やリーダーシップ、現役学生への学びの刺激などである。しかし、このような要件が、社会人学生への過剰な役割期待となり、圧力とストレスに感じられる指導に繋がっていると推測される。また、現役学生においても社会人学生に対する過剰な役割期待から、社会人学生に頼ろうとする意識や行動に繋がっており、そのために社会人学生は現役学生と関係性を保つうえで、負担を感じていると考えられる。そして、教員と現役

学生両者からの過剰な役割期待は、社会人学生の学習へのプレッシャーとプライドを強め、周囲への相談のしづらさや、助言を素直にきけないなど教員との指導関係及び現役学生との関わりに困難を感じることに繋がっていると考えられる。

魚住¹⁶⁾の社会人経験のある看護学生の心理的発達に関する考察の報告によると、成人期の発達課題（親密 対 孤立）は、現役学生と有意な差がなかった。差が無かったのは、社会人学生の職場の同僚や地域社会を共に生きる人間関係の関わりでの達成については、現役学生と同様であったからと述べている。また、大卒卒業者の採用に対する評価データでは¹⁷⁾、「読み書き能力」「論理性」は高いと4割以上の事業者が評価しているが「人格的な成熟度」については評価する事業者は少なかったという結果がある。すなわち、看護基礎教育機関へ入学する学士号をもつ学生や社会人経験のある学生についても「人格的な成熟度」の未熟さをもつ人たちが含まれるということを知り関わる必要がある¹⁸⁾。人間関係の達成度や人格的に未熟であるという、これら2つの報告から、学士号を持っているからとか、社会人経験があるからと過度な役割期待を寄せ、応えさせようとするのが圧力的な指導となっていることを教員自身が認識する必要がある。そして、教員は社会人学生に対し現役学生と同様に、看護の必要な知識を教育するとともに、一人の人間として、社会人としての教養と豊かな人間性、専門家として高い倫理観の育成を育むような教育も必要と考えられる。

一方、社会人学生は現役学生と分けてみないで欲しいと言いつつも、経験を認めて欲しい、すなわち経験を認められていないことで教員との指導関係に困難を感じていた。

渡邊ら¹⁹⁾は、社会人経験のある看護学生には、多くの経験に基づいた学びがあり、経験に頼る傾向や強い価値観という反応が生じやすいことを述べている。社会人学生が社会人経験を通して過去に学んだことが、今の価値判断基準になり、それを支えに状況判断をすることは、新たな学習をするプロセスにおいて必要なことである。しかし専門性の高い看護においては、

社会人としての経験からの状況の意味づけや自己判断では、援助はできない分野といえる。三木ら²⁰⁾は、「社会人学生と教員のもつ認識の違いについて、社会人学生は社会経験が活かされていることを教員以上に強く認識しているが、教員は社会人の経験がマイナスになっている等と認識しているところもある。」と述べている。さらに三木ら²¹⁾は、実習場にて社会人学生は、経験を生かしながらコミュニケーションが上手くとれていることを教員以上に認識しているが、教員は社会人学生が自己判断で行動しコミュニケーションがとれていることだけでよい看護ができていると判断することを強く認識する傾向がある。教員が期待するコミュニケーションスキルは、対人関係を円滑にするスキルに加え、患者との信頼関係を築くことでもあることから社会人学生ほど高く評価はしていなかったと報告している。このような、社会人学生と教員の認識のズレから、社会人学生は教員に経験を認められていないと困難を感じるようになっていくと推測される。そこで教員は、社会人学生に対し、初学者として新たに学ぶ看護の専門性における学習内容と目標到達度を示し、実習等では社会人としての経験からの状況の意味づけや自己判断では援助ができないことを実感できる場面の教材化を図ることが必要と考えられる。また、渡邊²²⁾は、「社会人経験者はそれまでの経験に照らし合わせて状況の意味づけをする傾向のあることから、内省することに助言を必要とする場面がある」と述べている。すなわち社会人学生は、教材化した場面のなかで自己省察（内省）をするためには、教員の助言する関わりを必要とする。そして、教員は社会人学生が自己省察(内省)の過程における助言を受け入れ、他者の様々な意見を聴き、広い視野で学ぼうとする意識がもてるように支援することが大切であり、それが社会人学生の新たに学ぶ姿勢の再獲得に繋がると考えられる。

VI 研究の限界と課題

本研究で用いたデータは、過去10年間の質的研究からの分析であるため限られた文献数であり、内容が全ての社会人学生の代表性を示しているとはいえない。しかし、社会人学生がキャリア変更に

至った経緯からの志望動機と、社会人経験があることで感じている困難の分析から社会人学生を理解する手掛かりを得ることができた。今後、これまでのキャリアを変更し看護を志望した社会人学生が、看護基礎教育機関においてどのように職業アイデンティティを構築していくのか、そのプロセスを調査したい。そして、将来的に看護専門職としてのキャリア形成ができるよう社会人学生を理解し、支援の在り方を検討していく必要がある。

VI 結論

社会人学生の看護への志望動機と就学上感じる困難について、文献的に検討し、得られた内容を分析したところ以下の結論が得られた。

- 1 社会人学生が看護を選択した志望動機は、【経済的安定のため】、【資格取得のため】、【看護への関心と魅力】、【看護の社会的価値】、【看護への関わり経験】、【自立への希求】、【知人のすすめ】の7つのカテゴリに分類された。
- 2 社会人学生が就学上感じている困難は、【教員との指導関係】、【現役学生との関わり】、【学習へのプレッシャー】、【家庭における非役割遂行】、【経済的自立との両立困難】の5つのカテ

ゴリに分類された。

- 3 キャリア変更のプロセスからみた社会人学生は、モラトリアム的な特徴と、高い自立志向の欲求をもっていることが特徴としてあり、現状に対する不満感からキャリア変更をしていることが考えられた。今後、看護専門職としてのキャリアを形成できるように、看護基礎教育機関で関わる必要があると示唆される。
- 4 社会人学生が就学上感じる困難は、教員による社会人学生の経験に対する過剰な役割期待によるものと、社会人経験を認めてもらっていないという認識から生じていると考えられた。
- 5 教員は社会人学生に対し、専門性の高い看護の分野においては、社会人としての経験からの状況の意味づけや自己判断で援助はできないこと。そして、看護の専門性における学習内容と目標到達度を明確に示しながら指導していく必要がある。

謝辞

本研究の分析及び考察にあたり、ご助言を頂きました川崎市立看護短期大学松本佳子先生に深く感謝を申し上げます。

文献

- 1) 一般社団法人 日本看護学校協議会 (2013) . 看護師養成所の管理・運営等の関する実態調査. 平成25年6月, p. 1.
- 2) 厚生労働省. ‘看護師等学校養成所入学状況及び卒業生就業状況調査’ [http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/List.do?lid=000001161444\(2016-11-21\)](http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/List.do?lid=000001161444(2016-11-21))
- 3) 厚生労働省. 看護師養成所における社会人経験者の受け入れ準備・支援のための指針. 2015年3月, p. 1.
- 4) 武士由美他. 社会人経験をもつ看護学生の学習上の課題—基礎看護実習の経験を通して感じた困難から—, 日本看護学教育学会誌26回学術集会講演集. Vol. 26, 2016, p145.
- 5) 小此木百合香・金子昌子. 看護専門学校における社会人学生と現役生のグループ学習の特徴. 日本看護学教育学会誌26回学術集会講演集. Vol. 26, 2016, p149.
- 6) 河合まゆみ他. 看護専門学校における高校新卒学生と社会人経験学生の学習意欲に関する要因. 日本看護学教育学会誌第25回学術集会講演集. Vol. 25, 2015, p172.
- 7) 高野真由美他. 社会人経験を有する新人看護師の就労継続に関連する要因—就労6ヶ月の困難感と取り組み—. 川崎市立看護短期大学紀要. Vol. 17, no. 1, 2012, p19-27.
- 8) 清水素子. 社会人経験のある看護学生の動向と卒後支援のあり方について. 聖マリアンナ医科大学雑誌. vol. 41, no. 1, 2013, p13-17.
- 9) 奥浩美. 学士号をもつ看護学生が看護教育機関を選択した要因. 聖路加看護学会誌, vol. 16, no. 3, 2013, p28-37.
- 10) 吉川浩美・田中奈緒子. 成人初期女性のキャリア変更過程—社会人経験を経て大学・大学院に再入学した女性を対象に—. 昭和女子大学生生活心理研究所紀要, 13巻, 2011, p72.
- 11) 風穴香織. 社会人学生の看護師志望動機と看護学校で学ぶことへの期待. 神奈川県立保健福祉大学実践教育センター看護教育研究集録, No. 40, 2015, p9-16.
- 12) 前掲10), p. 75.
- 13) 石井秀宗他・椎名久美子・柳井晴夫. 看護大学生の学習活動と学習意欲に関する研究. Quality Nursing. 9, (11), 2003, p. 972-986.
- 14) 原ちひろ. 看護専門学校における社会人学生と現役学生の学習意欲の検討. 日本看護学会論文集. 第45回, 平成26年, p55-58.
- 15) 小濱優子. 社会人学生の学習支援に関する研究. 文教大学付属教育研究紀要. 11号, 2002年. p. 83-90.
- 16) 魚住郁子. 社会人経験のある看護学生が学校生活の中で学び続けていくプロセス—学びの深化に関わる体験の語り—to着目して—. 日本看護学教育学会誌. vol. 25, NO. 1, 2015, p. 41-49.
- 17) 一般社団法人 日本看護学校協議会. 平成25年度厚生労働省看護職員確保対策特別事業 大学卒業者(看護以外の分野)の看護師養成機関への入学及び学習環境等の関する意見調査—大卒(看護以外の分野)・社会人経験のある看護師対象調査—. 2014, p. 43.
- 18) 前掲17)p. 43.
- 19) 渡辺恵他. 看護教員が認識する社会人経験のある学生の学習者としての特徴と教育の困難感. 第43回日本看護学会論文集看護教育. 2013, p. 106-109.
- 20) 三木隆子他. 3年課程看護専修学校の社会人学生と教員のもつ「学習および学習支援」に関する認識の違い. 四国大学紀要. (A)45. 2015. p44.
- 21) 前掲20)p. 45.
- 22) 前掲19)p. 109.